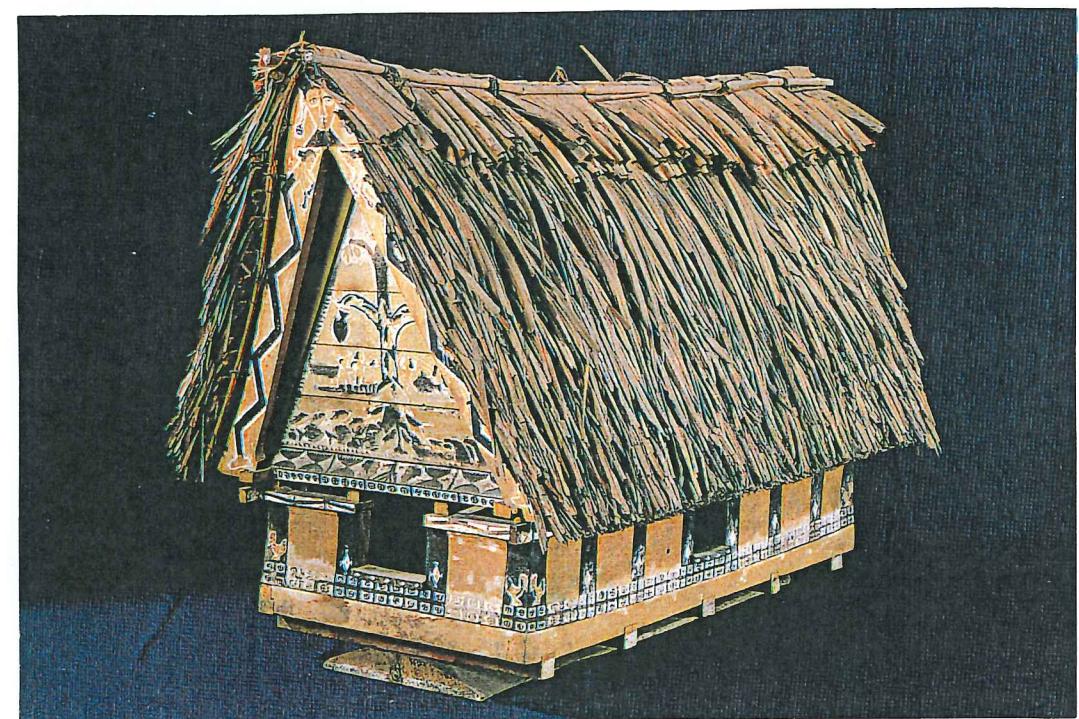


学習院大学史料館常設展

旧制学習院歴史地理標本室移管資料展



1998年～

はじめに

旧制学習院歴史地理標本室は、大正2～昭和24年(1913～1949)頃にかけて、旧制学習院の中・高等科に設置されていた施設で、教育・研究のための様々な資料を収集・保管していた。

この資料群は、標本資料として購入されたものはじめ、宮内省所管の機関から移管された資料、学習院関係者からの寄贈資料など、いくつかの出所をもって構成されている。そのひとつひとつが、戦前の学習院の特徴を示す貴重なものである。

今回、学習院大学史料館所蔵史料目録第14号『旧制学習院歴史地理標本室移管資料目録』(1998年3月)を刊行したことにともない、ここに資料群の一部を紹介することとした。

考古学資料

旧制学習院歴史地理標本室には、比較的多数の考古学資料が収蔵されていた。日本国内の出土品をはじめ、中国・朝鮮半島などの海外の資料も含まれ、時代的にも原始時代から近代初期に及んでいる。その中には、宮内省から移管されたと推定される応神天皇陵出土の伝承のある水鳥埴輪や、尾張徳川家が設立した明倫中学校付属博物館からの寄贈品や標本としての購入品、さらに教材として購入した複製品などがある。ただ、発掘調査による出土資料は学習院史学会が昭和 17・18 年（1942・1943）に発掘した東京都世田谷区喜多見古墳群の出土品だけである。

なお、学習院が学校法人となった以降に高等科や大学の輔仁会史学部が収集した考古学資料のうち、若干が学習院大学史料館に収蔵されている。

穀粒文玉璧 戰国時代（前4～3世紀頃） 史料館番号24

璧は、古代中国で君主からの下賜品や贈り物、祭祀の捧げ物などに用いられた儀器で、中央に円孔のある円盤状のものである。本資料は、軟玉製で全面に穀粒渦文の浮き彫りがある。

玉 璧 戰国時代（前4～3世紀頃） 史料館番号27

璋は、武器の戈の形をした扁平な祭器で、古代中国で山を祀るのに用いられた。本資料は軟玉製で、先端部が欠失している。

方格規矩鏡 後漢（1世紀） 史料館番号170

銅製で、背面の鉢（つまみ）の周りに8個の小乳と方格と規矩文で分割された文様がある。出土地不明だが、類似資料が中国陝西省千陽県の漢墓から出土している。

宣子孫銘方磚 後漢（1世紀） 史料館番号93

方形の磚（タイル）の平面の中央に「宣子孫、富益昌、楽未央」の篆書文字がある。出土地不明だが、中国内蒙古自治区清水河の漢墓から出土した同形資料が東京大学と京都大学に収蔵されている。

太王陵出土太王陵銘条磚 高句麗（5世紀） 史料館番号125・126

中国吉林省集安県の高句麗國好太王の陵墓と推定される太王陵からの出土品。細長い磚（タイル）の1側面に「願太王陵安如山固如岳」の隸書体の銘文が刻印されている。

綠釉倉明器 後漢（1～2世紀） 史料館番号286

明器は、古代中国で墓室に副葬するために作られた器物。本資

料は円筒形の倉をかたどった陶製で、外面に緑色の釉薬がかけられている。

唐三彩馬俑

唐（7～8世紀）

史料館番号287

鞍を着装した写実的な馬の像。緑・褐色・白の三色の鉛釉でみごとに着色されている。

唐三彩鎮墓獸俑

唐（7～8世紀）

史料館番号42

俑は、古代中国で祭祀や副葬用に作られた人間や動物の小像。本資料は角のある獅子型の頭と偶蹄の脚、両肩に小さな翼をもつ僻邪のための想像上の獸形をし、緑・褐色・白の三色の鉛釉で飾られている。

綠釉加彩武人俑

唐（7～8世紀）

史料館番号276

武装した唐代武官の像で、緑色の鉛釉の上に彩色されている。

伝応神陵古墳出土水鳥埴輪

古墳時代（5世紀）

史料館番号285

嘴と尾の先端が欠けているが、ほぼ完全な水鳥形の埴輪。宮内省からの移管資料と推定され、応神天皇陵すなわち大阪府羽曳野市の誉田山古墳出土との伝承がある。

等々力御嶽山古墳出土遺物

多摩川下流左岸の台地上には、大田区田園調布の亀甲山古墳から世田谷区玉川野毛町の野毛大塚古墳まで大小の古墳が分布しているが、等々力御嶽山古墳もその一つで、東京都世田谷区等々力1丁目にある全長52mの帆立貝式前方後円墳である。

大正年間に七鈴鏡の出土が報告されて知られていたが、昭和25年（1950）4月に学習院輔仁会高等科史学部員が木棺の埋葬された粘土櫛を発掘し、副葬された多数の鉄製品などを得た。

出土した鉄製品には、短甲2の他、鐵刀5、鐵劍4、鐵鋒1、石突1、胡録金具2、鐵鎌約100、鐵刀子1などがあり、これらの遺物から、古墳の年代は5世紀中葉と考えられている。

等々力御嶽山古墳出土短甲 古墳時代（5世紀）

史料館番号319-3

鉄板を鉢留めして成形した2枚の前胴と1枚の後胴で構成された3枚胴で、地板に三角形の鉄板が使用されたいわゆる「三角板鉢留短甲」である。

等々力御嶽山古墳出土短甲 古墳時代（5世紀）

史料館番号319-3

鉄板を鉢留めした3枚胴の短甲であることは、左の資料と変わらないが、地板に横長の鉄板を使用しており、いわゆる「横矧板鉢留短甲」である。

ミクロネシアの民具 —高松宮下賜資料—

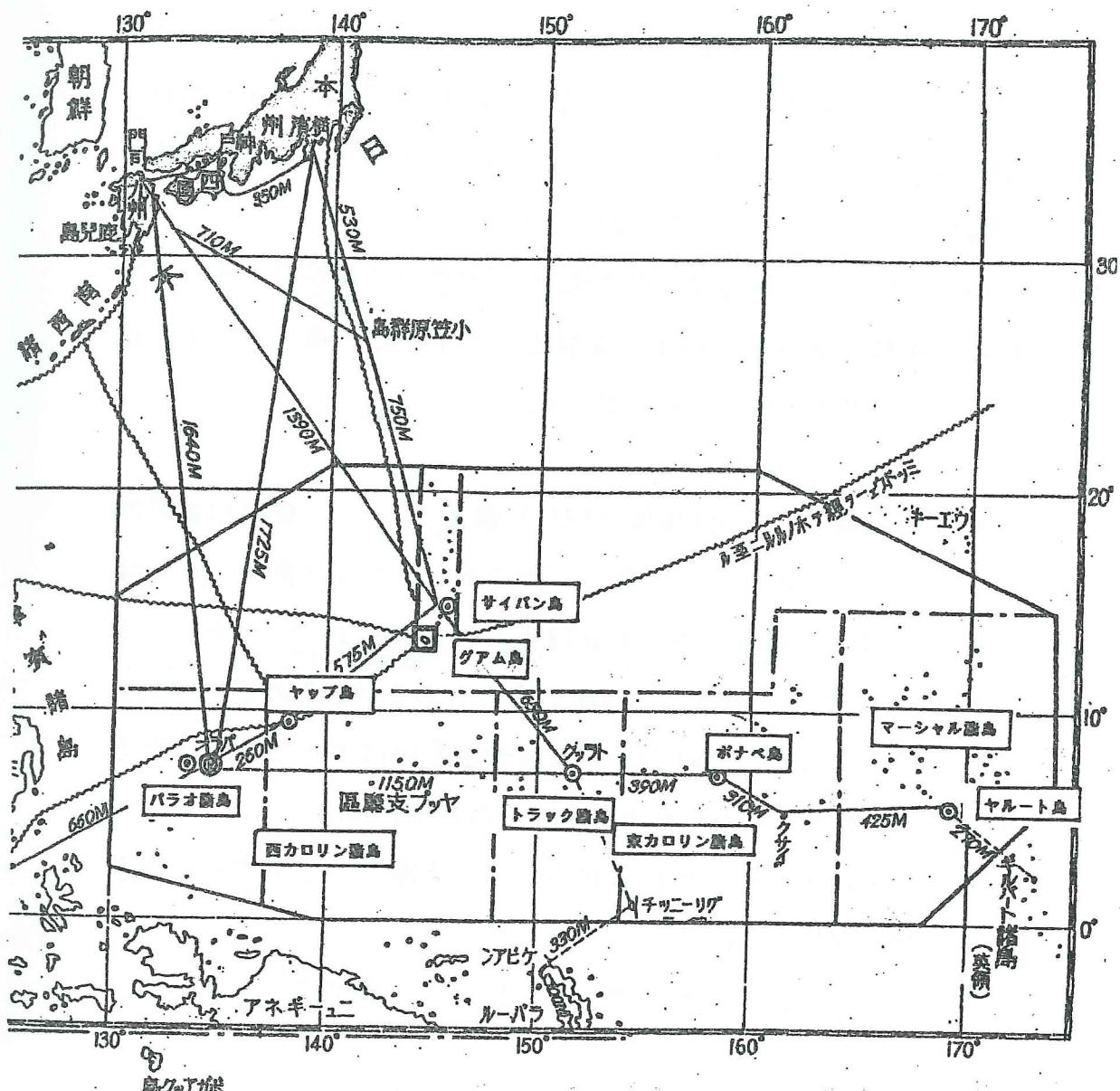
歴史地理標本室資料には 11 件の南洋関係の標本類があり、そのうち 9 件は南洋群島（ミクロネシア）のものである。南洋群島は日本の南海上北緯 10° 付近に散らばる島々で、現在はパラオ共和国、ミクロネシア連邦、マーシャル諸島共和国、アメリカ領グアムなどに分かれているが、第 1 次世界大戦後（1914～1947）は日本の委任統治領となっており、管轄の役所として南洋庁がおかれていた。

9 件のミクロネシア資料のうち、「コロール島アバイ模型」「マーシャル諸島ヌー模型」の 3 件は高松宮宣仁親王より昭和 11 年（1936）に下賜されたものである。高松宮宣仁親王は大正天皇第 3 皇子として明治 38 年（1905）誕生、学習院中等科を 3 年で退学した後、海軍兵学校予科に入学。大正 14 年（1925）に海軍少尉に任官された後に戦艦に乗船し、遠洋航海演習をおこなった。南洋方面では昭和 3 年（1928）と昭和 8 年（1933）に、2 回演習を行っている。

『高松宮日記』には昭和 3 年に関する記述はないが、昭和 8 年に關しては「7 月 21 日 南洋庁から先年と同じような品をくれた。」「7 月 26 日 パラオ島の北端のコレイ村へ上がる。」などの記述が見える。

今回展示している資料に関しても、南洋庁から寄贈されたものと考えられる。

南洋群島地図



（松岡静雄『ミクロネシア民族誌』1943 年、岩波書店

より転載、一部修正加筆）

パラオ諸島円形木皿・精円形木皿

史料館番号83-152

パラオ諸島の木製什器は、他のミクロネシア地域のものと比すると、精巧であり、装飾性に富んでいる。木をくり貫いた上に漆を塗布し、縁の数箇所に螺鈿を施している。底部には孔をあけ、紐を通してある。これは収納用に壁に懸けるためのものであるが、装飾性が高いため「見せる収納」となっている。

種類も豊富で、円形で器高の低いものは、「オルシャール」とよばれ、芋類（タロ芋の団子）を盛るのに用いる。精円形のものは「オガル」で魚を盛るために用いる。

ヤップ島石貨

昭和6年（1931）購入

史料館番号39

ミクロネシア連邦ヤップ島の石貨である。ヤップ島はパラオ島の北東 450km に位置する。石貨は小さいもので 20 ~ 30cm、大きいもので 2 ~ 3m、最大では 4m のものもあるが、その価値は大きさだけで決まるものではなく、石質や色合いによっても、またその石貨の来歴等によっても決まるといわれている。

日本の委任統治領時代には日本への手土産として手ごろな大きな石貨が持ち帰られていた。

なお、ヤップ島では現在でもこの巨大な石貨が流通している。

ヤップ島貝製品

昭和11年（1936）寄贈

史料館番号211

木箱に貼付されている箱書きには「南洋ヤップ島カナカ族男子専用首飾」とあるが、これは誤りで、ヤップ島の貝貨である。

タケノコ貝製手斧はヤシの穴あけ用に使用。シャコガイ製磨製貝斧は柄をつけカヌー等を作るために使用する。

寄贈者の松田正之は男爵で昭和 7 年（1932）2 月 5 日より 8 年 8 月 3 日まで南洋庁長官。

マーシャル諸島共和国産武器 パラオ諸島武器及び漁労具

史料館番号306-①、⑤、⑬

①、⑤はマーシャル諸島共和国産武器。マーシャル諸島はミクロネシア地域の最東端にある島々である。①は土分の者の武器。⑤は絞の歯を 4 列に並べたもので、酋長専用の武器である。

⑬はパラオ諸島産（推定）武器。

コロール島アバイ模型 昭和11年（1936）寄贈

史料館番号294

添書きに「アバイ模型七個、總北部總村長テンレイ」とある。

アバイとは男子集会所のこと。高床式で破風作りの屋根を有し、破風板や内部の柱などにその部落固有の物語が絵文字で表記されている。

かつてはアバイはパラオ島の各部落にあったが、現在は 2 棟しか残っていない。

束帶 — 宮内省移管資料 —

旧制の学習院は宮内省の所管であったことから、同列の機関である帝室博物館（現東京国立博物館）や教育博物館（現科学博物館）などから、資料の相互保管転換がなされていた。展示した束帶もその一つで、宮内省からの保管転換の書類が残る。

陳列した束帶は、昭和天皇の大礼の際（昭和3年11月10日）に、奏任官に配られた装束である。奏任官とは、明治19年（1886）の高等官等俸給令で定められた高等官で、各省の課長以下の事務官や技官などが相当する。即位礼では「正殿の儀」に際し、宮中正殿の階段を挟んで並ぶ「庭上の参役者」のうち、「威儀物棒持者」となった。

束帶とは、令制の男子の朝服である。天皇は束帶を即位以外の晴れの儀式に用い、臣下は参朝の時をはじめ大小の公事に必ず束帶を着した。束帶は、冠・袍・半臂・下襲・袒・单・表・袴・大口・石帶・襷・鞞などと、付属品の帖紙・笏・桧扇で構成される。

袍 昭和3年（1928）

史料館番号 295

袍は装束の一番上にまとうため、表衣とも呼ばれる。縫腋袍と闕腋袍の二種類があるほか、着る人の位によって色や模様に違いがある。本品は縫腋袍で、五位の者が着ることのできる「緋」色である。

冠 昭和3年（1928）

史料館番号 297

冠は黒の羅を張り、漆で固めたかぶりもので、頭頂を覆う「額」の後部に髻の入る「巾子」が立ち、後ろには「纓」が下がる。「巾子」の根本には「簪」がつく。

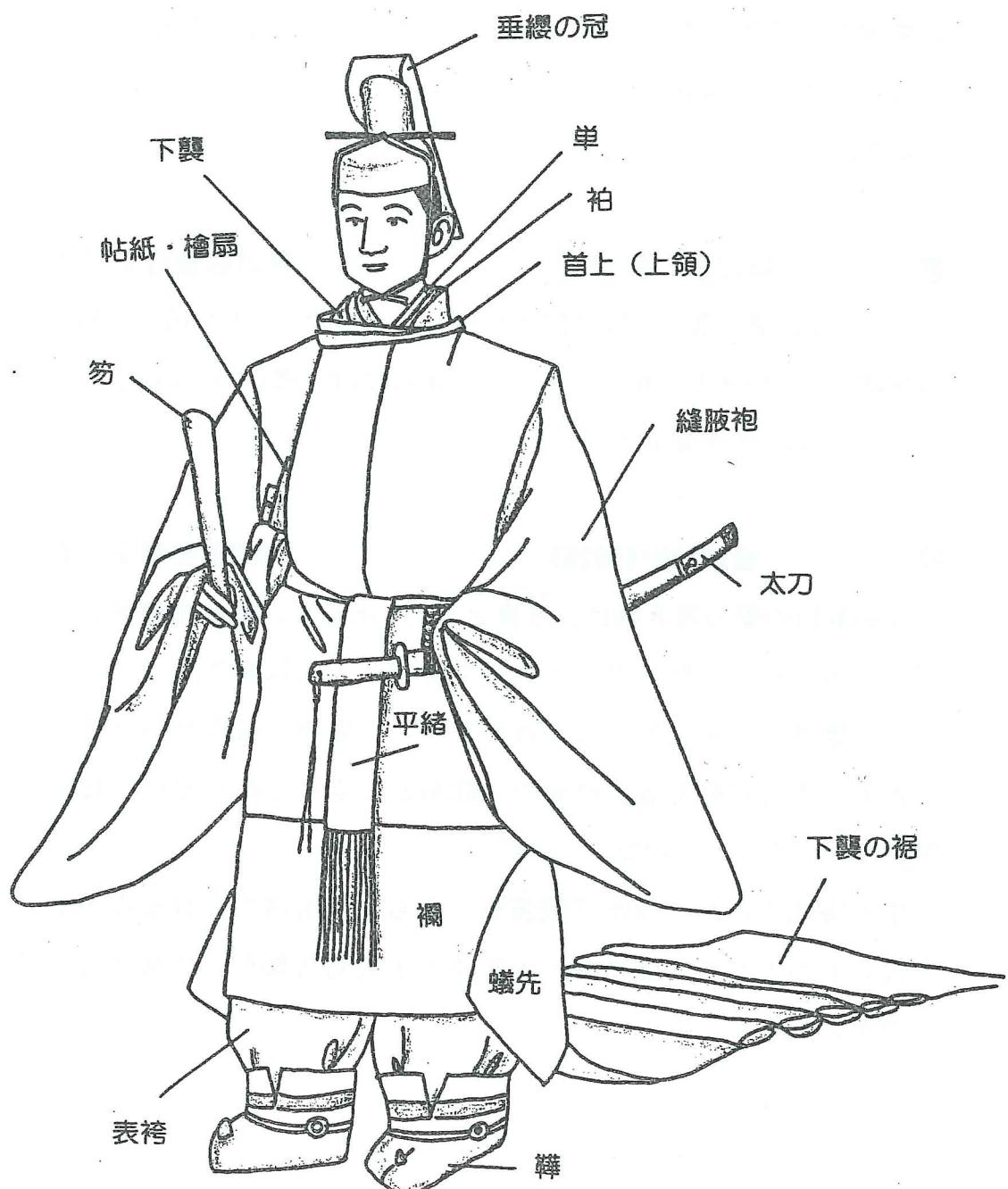
鞞 昭和3年（1928）

史料館番号 296

装束着用の際の履き物は、浅沓と鞞であるが、鞞は特に節会などに使用された。鞞は黒い革製の深靴で、元来は騎馬用のものである。足首の上あたりには「鞞毬」という織物の縁取りが付き、足首のところに付く金具付きの「鞞帶」によって締め付けて靴が脱げないようにしていた。

平安時代末におこった「強装束」から、靴も漆をかけるなどして固いものとなり、鞞帶などの実用の工夫も装飾化して儀式専用の履き物となった。

装束の名どころ



(仙石宗久『カラー版 十二単のはなし - 現代皇室の装い -』1995年
婦女出版より転載、一部加筆)

学習院史学会関係資料

学習院史学会は、輔仁会史学部の前身であり、昭和3年（1928）1月21日に学習院旧制中等科4年生以上と旧制高等科学生の有志によって歴史と地理の学習と研究を目指して、同好会として設立された。以来、昭和18年（1943）3月に文化部の一つとして輔仁会に編入されるまで、研究会・講演会・展覧会見学・見学旅行などの活動を続け、昭和5年（1930）7月から毎年1冊の割合で機関紙『学習院史学会々報』を刊行した。

会の活動の中でも力を入れられたのは「見学旅行」で、昭和4年（1929）6月の狭山東村山方面を皮切りにして、初期には東京周辺の小旅行が多かったが、やがて近畿地方・中国四国地方・九州地方へと旅行の範囲を拡大した。近畿地方への見学旅行は毎年の慣例となった。さらに会員の有志は朝鮮半島・中国大陆へも足を延ばしている。

これらの見学旅行の計画立案のために収集した各地の私鉄会社などの案内書、あるいは旅行の記念などとしてもたらされた絵葉書が学習院大学史料館に保存されている。案内書は大正12年（1923）発行の『武蔵野鉄道案内』から昭和14年（1939）2月発行の『齊齊哈爾』まで1920～30年代のものまであり、絵葉書には日本の寺院や観光地のものもあるが、多くは朝鮮・旧満州・中国などの地域のものであり、今日では史料的価値がある。

各地の観光案内・絵葉書・写真等

史料館番号320-5、54、67、66、80、92、96、119、126、129、
130、139、140、151、153、154、252

史学会旅行一覧

年代	西暦	行事	会報記載号
昭和2	1927	史学会創立	創刊号
昭和4	1929	狭山・東村山方面見学	創刊号
昭和4	1929	この夏の鮮満地方旅行団の話を聞く会	創刊号
昭和5	1930	日光	第2号
昭和6	1931	京都・奈良・大和	第2号
昭和7	1932	京都・奈良・大和	第3号
昭和7	1932	箱根	第3号
昭和8	1933	京都・奈良・大和	第4号
昭和8	1933	太田・足利	第4号
昭和8	1933	仙台・平泉	第4号
昭和8	1933	湯河原・大山	第4号
昭和8	1933	満州旅行を聞く会	第4号
昭和9	1934	九州旅行	第5号
昭和11	1936	京都・奈良・大和	第7号
昭和11	1936	湖南	第7号
昭和12	1937	南九州	第8号

明倫中学校付属博物館

寄贈資料

明倫中学校付属博物館は、尾張徳川家藩校「明倫堂」と「愛知県教育博物館」に端を発する日本最古の私立博物館で、明治34年（1901）から大正15年（1926）まで存続していた。大正15年に明倫中学校が愛知県に移管されるに伴い博物館は閉鎖され、標本類の多くは同校に引き継がれたが、一部は学習院に寄贈された。これは当時の当主徳川義親氏がかつて学習院で生物学の教鞭を執った縁故によると推測される。

明倫中学校付属博物館から学習院への寄贈資料として、從来中等科生物教室蔵の剥製標本などが知られていたが、学習院大学史料館にも一部が収蔵されており、アイヌ関係資料と古瓦資料とに分けられる。

カンジキ 明治～大正時代（20世紀）

史料館番号135・136

アイヌ語でテシマ（tesima）と呼ばれる木製の雪上歩行用具。この他に瓢箪形のカンジキ（アイヌ語でcinru）も同時に移管された。

矢箇

明治～大正時代（20世紀）

史料館番号289

矢の容器でアイヌ語でイカヨップ（ikayop）と呼ばれる。本体は木製で上に樺皮と桜皮を巻き、蓋は熊皮製。

しゅもんえんとうふくじめいのきまるかわら
珠文銀東福寺銘軒丸瓦

室町時代（1400年頃） 史料館番号64

京都市東山区本町にある京都五山の一つの東福寺の応永年間に作成された瓦。軒丸瓦は、屋根の丸瓦列の先端で軒先を飾る瓦。

珠文銀東福寺銘軒丸瓦

江戸時代（1600）年頃 史料館番号67

東福寺の慶長年間の修復に使用された瓦。

東福寺銘軒丸瓦

享保5年（1720）

史料館番号55

東福寺の享保5年修復の際の使用瓦。

仁和寺銘軒丸瓦

江戸時代（17世紀）

史料館番号29

京都市右京区御室にある仁和寺の屋根を飾った瓦で、寛永～正保年間（1624～1647）の修復に使用された。

名古屋七ツ寺所用鬼瓦

元禄3年（1690）

史料館番号63

名古屋市中区大須2丁目にあり、尾張藩主の祈願所であった長福寺の鬼瓦片で側面に「元禄三」のへら書がある。

法華經第六卷瓦經
がきょう

承安3年（1174）か

史料館番号4

瓦經は、平安時代の末の末法思想の普及で、粘土板に経文を刻んで焼成し、経塚に埋納した瓦製の教典。本資料の側面に「三重県経峯出土」と墨書されているが、製作技法・書体・筆跡から三重県伊勢市浦口町3丁目の小町塚経塚の出土品と推定される。

なお、本資料は明倫中学校付属博物館旧蔵か不明である。

◇構成・執筆

岡田茂弘（国立歴史民俗博物館教授・学習院大学史料館客員研究員）

長佐古美奈子

西田かほる

学習院大学史料館常設展

旧制学習院歴史地理標本室移管資料展

会期 1998年10月～

編集発行 学習院大学史料館

〒171-8588 東京都豊島区目白1-5-1

Tel.03-3986-0221

発行年月 1998年10月
